竜王町ブタイ遺跡の発掘調査において検出された公的施設と出土した木簡について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、竜王町教育委員会からの依頼により、工場用地整備工事に伴うブタイ（ぶたい）遺跡の発掘調査を平成 28 年７月から 12 月にかけて実施しました。

発掘調査では、奈良時代の建物跡や運河的機能を有すると考えられる大溝が発見されました。大溝からは多量の須恵器や木器とともに、人名の記載がある木簡が出土しました。

みつかった遺構は、遺跡西側にある県下最大の須恵器生産地である鏡山古窯趾群（かがみやまこようしぐん）に関連する公的施設と考えられ、出土した木簡に書かれた人名は、何らかのかたちで須恵器生産に関係する地元の人物と考えられます。

今回の調査成果につきましては、一般の方々を対象として、第 108 回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「土の中から歴史が見える’16」で報告します。

なお、現地調査は終了していることを申し添えます。

記

(1)遺 跡 名：ブタイ遺跡

(2)所 在 地：蒲生郡竜王町大字山面字ブタイ地先

(3)調査期間：平成 28 年（2016 年） ７月～12 月

(4)調査面積：2,240 ㎡

(5)調査主体：竜王町教育委員会

(6)調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

(7)一般の方々への公開

滋賀県埋蔵文化財センターが開催する第 108 回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「土の中から歴史が見える’16」にて報告します。開催内容は以下のとおりです。

①開催日時：平成 29 年(2017 年)3 月 11 日(土)　 9 時 30 分から

※ブタイ遺跡の報告は午後 1 時 10 分(予定)からになります。

②開催場所：コラボしが 21　3 階大会議室(大津市打出浜 2-1)

③交通機関：京阪電車「石場」駅より徒歩 5 分

JR「膳所」駅より徒歩 15 分

JR「大津」駅より京阪・近江バス(湖岸線)に乗り換え(乗車約 7 分)商工会議所下車

1. 調査の概要

ブタイ遺跡は蒲生郡竜王町山面にある遺跡です。平成 14 年度に行われた発掘調査では、7 世紀後半～8 世紀後半頃の大型掘立柱建物や、それら建物群を囲む溝などが見つかり、多量の遺物が出土しました。

県下最大の須恵器生産地である鏡山(鏡山古窯趾群)山麓に位置することもあって、古代の公的施設跡と想定されていました。

2. 調査の成果

(1)検出遺構

今回の調査は、平成 14 年度の調査地に近接する地点で発掘調査を行いました。調査の結果、平成 14 年度調査地付近では 8 世紀頃の掘立柱建物 3 棟がみつかるとともに、大きな人工水路(大溝)がみつかり、多量の須恵器や土師器、木器などが出土しました。

大溝から出土した須恵器には不良品が多く含まれていました。木器も破損したものなどが含まれていました。土器や木器が水の流れで水磨された形跡がみられないことから、上流から流れてきたのではなく、近辺から投棄されたものと考えられます。

今回みつかった 8 世紀頃の掘立柱建物と大溝の規模は以下のとおりです。

掘立柱建物　南北 5m 以上×東西 4m(3 間以上×3 間)･･･1 棟
南北 5m×東西 4m 以上(2 間×2 間以上)･･･1 棟
南北 6m 以上×東西 2m 以上(2 間以上×1 間以上)･･･1 棟

大　　溝　幅約 5m・深さ 1.7m・長さ 56m 以上

(2)出土遺物

大溝から出土した須恵器には、焼きが弱いものや焼け歪んだものが多く含まれます。これら不良品の須恵器は生産地近隣の遺跡で出土する特有の遺物です。

土器の他には長さ 2m～3m ほどの製材木や木製の皿や槽なども 200 点近く出土しました。未成品や破損品もみられるので、これら木製品も須恵器生産とともに、鏡山の山林資源を利用して作られたものと考えられます。

また、鉸具(かこ)・巡方(じゅんぽう)などの帯金具も出土しました。これらは当時の役人が身に着けていたものであることから、みつかった遺構は公的施設跡の可能性が高いことが分かりました。

図１　調査地の位置と竜王町域の鏡山須恵器窯分布図

●木簡について

大溝からは「桐原郷薏 原　史 」と書かれた木簡が出土しています。下端が尖った木札に書かれており、何らかの荷物に突き刺して使用したものと思われます。

「桐原郷」とは現在の近江八幡市域の南西部付近をいいます。「郷」とは古代律令制下での行政区画のひとつで、郡内の一区域のことです。50 戸で 1 郷とされます。

「薏原史」は氏族名です。もともと「史」(ふひと)は姓(かばね)で、大和政権が与えた社会的地位を指します。正倉院文書によると、「薏原人麻呂」という写経生(写経所などで経典の書写に従事した人)が知られ、また近江国野洲郡敷智郷に薏原史宿奈麻呂という人がいたことが分かります。

出土した木簡にある「薏原」という人は、正倉院の文書と同じ人ではなく、同じ名をもつ氏族の一人と考えられます。

木簡は下端部が尖っており、この形から荷物に付けて使用する付札木簡と考えられます。薏原という人が納めた物資が鏡山の開発を管理する施設へ届けられ、消費された後、不要となったので他の不良品須恵器や木製品と同様に大溝へ投棄されたと考えられます。

3. まとめ

竜王町域から野洲市域・湖南市域の山麓には多数の須恵器を焼いた窯跡があることが分かっています。その中で、ブタイ遺跡の西方にある鏡山は、鏡山古窯趾群として県下最大の須恵器の生産遺跡として周知されています。ブタイ遺跡は鏡山の麓に立地しており、平成 14 年度の調査結果から、鏡山古窯趾群と密接に関係する遺跡として注目されていました。

複数の掘立柱建物とそれらを囲むようにある溝、多量の土器や木器が出土した大溝、公的施設などで発見例が多い帯金具や木簡などがみつかったことから、平成 14 年度調査と今回の調査でみつかった遺構は、鏡山の須恵器生産を管理するための公的施設のひとつと考えられます。多量の土器や木器がみつかった大溝は、幅が広いことや水深が深いことから、船の航行を意識した人工水路と考えられます。大溝は掘立柱建物群とほぼ同じ南北方位を向いており、操業中の須恵器窯と、官道や河川と接続していた可能性があります(図 2)。大溝の機能としては、須恵器窯から搬出された製品(窯出しして 1 次選別後)を、集積するため今回調査地の施設に運び込み、ここで選別(2 次選別)した後に船を用いて出荷する運河的な機能があったと考えられます(図 3)。大溝から多量に出土した土器や木器は、出荷に堪えられない製品で、選別場で投棄されたものと思われます。

出土した木簡に書かれた人名は、地方豪族の一人でしょうが、何らかのかたちで鏡山の開発に関係していた人物と考えられます。

平成 14 年度と今回の調査により、奈良時代頃の鏡山古窯趾群と周辺遺跡の状況が垣間見えました。須恵器生産をはじめとした鏡山の開発は、山中だけではなく山麓から平野部にかけて様々

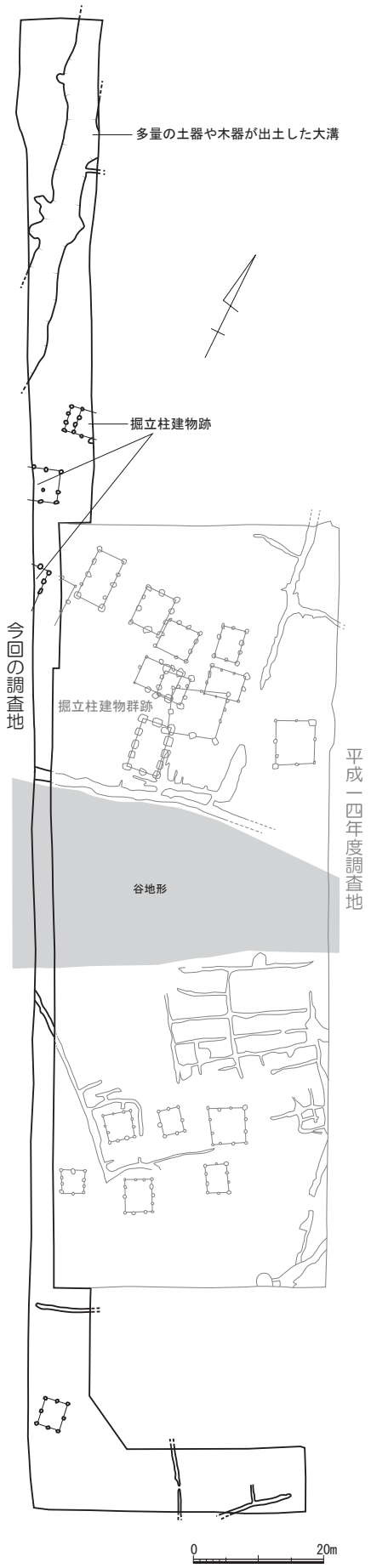
多量の土器や木器が出土した大溝
掘立柱建物跡
今回の調査地
掘立柱建物群跡
谷地形
平成一四年度調査地
0
20m

図２　遺構平面図

な関係施設が展開していた可能性が高くなりました。約 1,300 年前には須恵器の生産・木材の加工、それらを管理する施設や働く人々の集落などが広域に展開していた可能性があります。また、帯金具の鉸具・巡方や木簡の出土から、公的な施設が設けられ、そこに地方豪族も関与していた様子が具体的にみえてきました。

今回の調査は、これまで分かっていなかった鏡山古窯趾群の周辺状況の一端が明らかとなった重要な成果といえます。

図 3　ブタイ遺跡　想像復元図

写真１　掘立柱建物

写真２　大溝

木簡写真

木簡赤外線写真

写真３　ブタイ遺跡出土木簡